

令和6年度 福祉サービス第三者評価結果 【全体の評価講評】

短期入所	
特に良いと思う点	
1	利用者の障害特性は多様であり、年齢層も未就学児から60歳近くまでと幅広い。そのため、個々の特性に応じた看護・療育に取り組んでいる。入所の都度、家族から家庭での生活状況などを聴取し、医師による健康チェックを実施するとともに、過去の入所記録等を踏まえたアセスメントをおこない、可能な限り家庭に近い生活が送れるよう支援している。また、利用者調査では「迎えに行ったとき、いつも穏やかな表情をしているので、気遣いながらよく対応してくれていると感じる」といったコメントが寄せられ、個別性に配慮した支援が評価されている。
2	虐待防止委員会を中心に、個別事案を扱う虐待防止小委員会と、実務を担う虐待防止ワーキンググループを設置している。虐待防止委員会では、虐待防止マニュアルの改定を進めるとともに、全職員対象の研修や外部講師による研修を実施し、当日受講できなかった職員にはeラーニングを提供している。虐待防止ワーキンググループでは、全職員を対象に虐待防止チェックリストを実施・集計し、結果を分析して改善策を検討している。さらに、年2回の病棟ラウンドを通じ、現場の課題を把握し、適切な対策を講じている。
3	短期入所アンケートをWEBで回答できる仕組みを整え、利用者の意見を改善に活かせるようにした。さらに、幹部が意見や提案に回答し、それを掲示し、事業所の改善点や考え方を明確に示せるようにしている。また、短期利用者の持ち込み物品について、家族に事前記入を依頼する方式を導入し、荷物確認の時間を短縮した。持参物品チェックリストの活用が進み、確認作業の効率が向上するとともに、リストを細かく記録することで退所時の忘れ物防止にもつながっている。
さらなる改善が望まれる点	
1	受け入れ病棟の看護職や福祉職、医療福祉相談室の職員は、利用者やその家族が安心してサービスを利用できるよう、事前に家族の要望を丁寧に確認するとともに、現在の健康状態や生活上の困りごとについて詳しく聴き取り、個別性のある支援をおこなっている。また、支援方針や具体的な療育内容、1日の生活の流れについては、専門用語をできるだけ避け、わかりやすく説明することを心がけている。今後は、こうした支援内容を明文化し、書面として提供することで、より一層の家族との情報共有を進めることができると思う。
2	センター新聞を毎月発行し、センター全体の取り組みを積極的に情報提供している。利用終了時に、家族に対して、利用中の様子について口頭で情報を伝えている。しかし、利用者調査では、「退所時は時間が少ないので、口頭では聞けないこともあるため、書面でのやり取りが欲しい」などのコメントが寄せられた。在宅生活への継続性への配慮や家族の安心を得るためにも、利用中の利用者の状況について家族との情報共有の方法についてさらなる工夫を期待したい。
3	短期入所の利用者は、基本的に個室で過ごしているため、集団活動には参加していない。また、感染リスクを考慮し、センター行事への参加も控えてもらっている。そのため、各自の余暇の過ごし方としては、好きな音楽を聴くことや、心理的なケアが必要な場合には医師の判断のもとで対応するなど、個別に楽しめる時間を設けている。しかし、利用者調査では「もっとさまざまな活動を体験したい」との意見が寄せられていた。短期入所の利用者にもより充実した余暇活動の提供についてさらなる工夫を期待する。